
生徒会長が一方通行を召喚しちゃった

イエッサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長が一方通行を召喚しちゃった

【Nコード】

N5106X

【作者名】

イエッサー

【あらすじ】

数十年前に壊れた聖杯戦争のシステムを使い、更識楯無が一方通行を召喚！？新たな物語は、異端なる科学と科学が交差するとき始まるかもしれないけど、やっぱりご都合主義。

新たなストーリー（前書き）

一方通行の人物像は、原作の禁書目録の22巻の表紙をめあすにしていただけと幸いです。

新たなストーリー

ここは、IS学園のとある一室、生徒会室である。

そこでは、とある古文書を偶然手にしたIS学園最強が新たな物語を始めようとしていた。

「お嬢様、本当にやるんですか」

心配そうに言ってきたのは、更識家に代々仕えてきた布仏家の家系にある、布仏虚である。

眼鏡に三つ編みというちょっと堅い感じのしっかり者で、顔もそれなりに整っている。

「おもしろそうだねえ」

布仏虚の言葉とは対照的な言葉を発するのは、布仏虚の妹である布仏本音だ。

姉より二つ下の一夏のクラスメイトである。

改めて思うが、実の姉妹でここまで違うのに驚かされる。まあ、可愛いからいいのだが。

「まあまあいいじゃない。面白そうだし。試しよ、試し。それに、お嬢様はやめてよ」

椅子に腰をかけて、そんなことを言っているのが、IS学園の最強たる存在、生徒会長更識楯無である。

青く透き通った短髪で、ナイスバディとしか言いようのないボディラインをもち、発育の方もそれなりの成果を上げている。

そう言つて楯無は、ゆつくりとした動作で椅子から腰を上げる。

右手には何やら古い書物のような一冊の本が握られていた。隣の部屋へと続くドアへと手をかけ、ギィギィ・・・と音を鳴らしながら扉を開ける。

その扉の向こうには、何かの液体で描かれた魔法陣のようなものがあつた。

虚は、オカルト的な、という目をして見ていたが、楯無の瞳には、これから起こる非現実的なことを見透かしてるかのように、期待と慢心、何より面白いものが手に入るといふ強欲のような感情が一番大きかつた。

楯無は、魔法陣らしきものの中心へと歩いてゆき、古い書物のある一ページを開いた。

そのページには、何やら呪文のようなものが描かれてあり、少々言いづらい文章だつた。

楯無は、ゆつくりと深呼吸を二、三回程行つと、躊躇なく古文書に書かれてある文章を読み始めた。

「・・・告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善となる者。我は常世総ての悪を敷く者。汝三大主言霊を纏う者」

魔法陣は神々しい光を放つが、同時に、魔法陣を中心に強い風も起こっている。

楯無は、少し辛いのか表情を少し苦痛にゆがませるがかまわず呪文を唱え続ける。

「抑止の輪より来たれ天秤の守り手よ！」

辺りは光におおわれ、突風も何かを避けるかのように四方八方へと分散した。

楯無、虚、本音の三人は、あまりにも突然な光と風について目を閉じてしまうが、風がやんでいくと同時にゆっくりと目を開く。

そこには、色が抜けおちたような白髪に猛獣のような紅い目をもった、一人の青年が立っていた。

青年はこの緊迫とした空気の中、楯無だけを見てその重い口を開いた。

「サーヴァントイレギュラー、聖杯に招かれし英霊だ。テメエが、オレのマスターか」

ここに、異端なる科学と科学が交差するとき、新たな物語が始まる。

新たなストーリー（後書き）

初めて書きましたが、どうだったでしょうか。

コメントや、アドバイスをくださると大変うれしく思います。
どうか、次回もよろしく願います。

英霊は超能力者（前書き）

一方通行の人物像は、原作の22巻の表紙をめあすにいただくと幸いです。

英霊は超能力者

「つまりテメエーは、もう数十年前に壊れた聖杯戦争のシステムを使つて、脾肉にもこのオレをサーヴァントとして召喚したツてか」

今は契約を済ませ、現状確認をしている最中である。

お互い向かい合つて座り、相手の出方をうかがっているという感じである。

一方通行は、長い溜息をすると口を開いた。

「はアー、くだンね。願望器を手に入れられるわけでもないのに、なんでオレがこんな三下アのサーヴァントしなきゃなんねえーンだよ。あー今すぐ死にてエー」

今の言動からわかるように一方通行は、ネガティブ思考らしい。

今にも、窓から飛びおりて自殺してしまいそうな勢いで、床に両膝両腕を地面につけて挫折している最中である。

しかし、一方通行の『三下ア』という単語を聞いて黙っているような楯無ではない。

「なすがに、三下は傷ついちゃうなー。私、泣いちゃうかも」

どうやら、相当『三下ア』が気に入らなかったのか、泣くふりをしながら言い返す楯無。

「ああア、何言つてんだ。そんなことばっか言つてると格がしれるぞオ」

その言葉が引き金となったのか、楯無と一方通行の間に、見えな
い電撃戦争が繰り広げられた。

虚と本音は、こんな楯無を見るのが初めてなのか、それとも初対面
のはずの楯無と互角に渡り合っている一方通行に驚いているのか、
二人とも、部屋の隅っこで両手を握り合いながら震えている。

二人は、少しの時間にらみ合っていると、楯無が口を開いた。

「わかったは。こうなったら勝負でけりをつけましょう」

「は、おもしれエ。IS対超能力者ってか」

「じゃあ、場所取りしてくるから、ちょっと待っててね」

楯無は、ウインク&笑顔を残して、手を振りながら部屋を出て行っ
た。

その姿は、まさに女神だったという伝説も残されている。

第3アリーナ

「一応確認しておくけど、本当に大丈夫なの」

楯無は、ISを起動させた状態で一方通行に問いかける。

楯無のISは、水を具現化させたようなISで、全体的に面積が小
さく、狭い。

また、その体格に似合わない大型のランスを持っていて、アクア・

クリスタルと呼ばれているパーツが、水のようなシールドを作り出し、大きなマントのように楯無を包みこんでいる。

それに対して一方通行は、白をモチーフとした服を着ているだけで、武装は何もしていない。

この状態でもう勝負は決まったようなものだ。
だが、一方通行は、何も微動だにせずただこう言った。

「ああ、問題ねエ。即行で勝負を決めてやるよオ」

まるで、勝負の行方を知っているかのように。

「ええつと、それでは試合始め」

少し、混乱しながらも試合の合図をする虚さん。

胸が、いい具合に揺れてグハッ。

戦いの火ぶたが切っておろされた。

といっても、やっぱり超能力者であろうと生身の人間と戦うのは気が乗らないのか楯無は一方通行の出方を伺っていた。

しかし、一方通行は足の裏にかかるベクトルを操作して、生身の人間ではありえないスピードをだし、一気に楯無に近づく。

「ッ」

楯無は、今起きた現状を受け止めきれず一方通行の接近を許してしまっが、楯無も伊達にIS学園最強を名のっているわけではない。

楯無は、アクア・クリスタルによる水のヴェールで防御しようとするが、一方通行は物をどかさような仕草で、アクア・クリスタルの

シールドを崩し、はたまた、風の流れをベクトル操作し、かまいたちのようなものでアクア・クリスタルそのものを粉碎した。

楯無は、アクア・クリスタルの爆発による反動で一方通行から距離を取るが無傷とまではいかなかった。

一方通行がかまいたちを起こした時、少なからずシールドバリアーを持っていかれたのだ。

「なるほどオ。それなりの強さだな。オレの速攻をを防いだのはお前が二人目だア」

「あら、ほめてくれるの？それは、ありがたいわ。ありがとう、超能力者さん」

そう言うて楯無は、大型のランスをかまえる。

防御の要である、アクア・クリスタルが全機破壊されたのだから、当然の対応だ。

「だが、次で最後だ。覚悟しろよガキ」

「（相手が、簡単に炎を出す能力者なら簡単だったけどなあ。相手は、ふつつじや起こり得ない現象を起こしてわたしを混乱させてくる。なら、先に先手を打つ！）」

楯無は、ランスを改めて強く握ると勢いよく前に出た。

「（あのスピードは、驚異的だけどこっちから間合いを詰めれば使えないはず）」

楯無は、躊躇なくイグニションブーストを使い一気に一方通行の懷まで飛び込む。

「これで、終わり！」

楯無は、右手に持っているランスにエネルギーを集中、圧縮させ一方通行に放つ。

もはや、相手が生身だろうが関係なしに。

だが、現実の時として悲惨だ。

楯無の、攻撃は確かに一方通行に直撃したはずなのに一方通行には傷一つ付いていない。

それどころか、楯無のランスが紙くずのように砕け散り、ランスを持っていた右手を中心に真後ろに吹っ飛ばされ、壁に激突した。

まるで楯無の攻撃がそのまま返ってきたかのように。

なんとか、絶対防御のおかげで人体への損傷はないが、ISがボロボロだった。

「まったくもう、今のこういうトリックよ。レディーへの手加減がなつてないわね」

楯無はもうろうとした意識の中、なんとか立ち上がり一方通行に語りかけた。

「簡単なことだ。オレに向かってくる力の向きを全部反射しただけだア。それじゃあ、最後だア」

一方通行は、右足でつよく地面を踏むと、そこを中心に亀裂が走り、第3アリーナを崩壊させていく。

「クソガキ」

そこで、楯無の意識は途絶えた。

場所は変わって保健室。

「うつ」

楯無は、ゆっくりと目を開く。

「起きたかア」

そこには、勝者一方通行が呑気に椅子に座って缶コーヒーを飲んでいた。

「保健室は、飲料禁止だよ？」

「こまけーエことは気にすんな」

楯無は、ベットから上半身だけを起こして「虚と本音は？」と、問いかけてきたが、アリーナの後片付けと言ったら、あはは、と何か現実から目を遠ざけていた。

「それにしても、力の向きを操るなんてすごい能力だね。でも、どうやったらあそこまで強力な能力になるの？」

楯無は、実に単純なことを聞いてきた。

まあ、自分の攻撃が一切聞かなかったことが今でもショックなんだろう。

「能力は、基本的に脳による演算によって行使される。つまり、頭がよけりゃア、どうにかなるってことだア」

一方通行は、あと、と付けくわえて重大な発言を加えた。

「胸、見えてるぞオ」

楯無は、最初キョトンとした顔だったがゆっくりと自分の胸の方へと目を向けると、ISスーツがボロボロになり、胸の3分の2が見えている状態の上半身があった。

「あわわわ」

楯無は顔を真っ赤にし、急いで毛布を使って自分の胸を隠した。

「えっちい」

グハッ。

一方通行の心に、表に出したらやばい感情が急上昇してきた。

一方通行は、数秒間あの感情と戦い、どうにか沈めることに成功し、椅子から立ち上がった。

「少なくとも、お前をマスターとして認めてやるよ」

一方通行は顔を赤くしながらそう言って、楯無の頭に飲みかけの缶コーヒーを置いて行き保健室を出た。

頭に乗った、缶コーヒーを両手に取った楯無の顔をどことなく笑っていたという。

英霊は超能力者（後書き）

みなさん、どうでしたか。

今回は、3000字ほど書いたので、それなりに大変でした。更識楯無のうまい書き方があればぜひ教えてください。次回もよろしく願います。

人物AからIS奪ったぜww(前書き)

皆さんのおかげで、もう5000PVを超えました。
これからもよろしく願いします。

人物AからIS奪ったぜww

「バカな生徒会長の幼馴染でこのクラスに転校してきた一方通行だア。偽名じゃないぞオ」

オレは今、IS学園の一年一組で自己紹介をしている。

はは、本音がバカみたいに手を振ってるよ。

ほかの女子も騒いでいるけどオ。

さて、なぜ英霊である上に男であるオレがIS学園に入っているかというと、サーヴァントとして召喚された日から二日後、オレは、とあるお荷物を抱えて生徒会室に行った。

それが、今回の引き金になるとも知らずに。

「マスター、IS手に入れちゃったア」

なにげない一方通行の平凡な一言。

「へえー、よかったじゃない。って、ええええええええええええ」
楯無を含め、側にいた本音も大声で驚いている。

「一方通行さん、すごいですね」
虚にいたっては、いつも通り冷静だ。というより天然だ。

「いや、虚、そうじゃなくて、なんで一方通行がIS持つてるの？」

「ああア、それがさつき……………」

一方通行は、缶コーヒーを買いに自販機を目指して歩いてきた。自販機の前まで行くと、一方通行はある異変に気付いたのだ。

「な……い……だ……と……」

そう、ないのだ。

無糖の缶コーヒーがないのだ。

あるのは、カフェオレや微糖といったコーヒーだけ。

これから、言えるのはただ一つ！

織斑千冬は、甘党派だ。

これなら、茶道部の顧問になっているのも納得がいく。

いやー、見た目によらずいちずですなあー、彼女も。

さてと、現在の一方通行はというと……………挫折だな。

一方通行は、見事なほどに挫折していた。

仕方ないから、5km離れた自販機に行こうと一方通行が立ちあがったとき彼は見た。

30メートルほど離れた木の影で誰かが、my love 無糖缶コーヒーを飲んでいる姿を。

その、猛獣のごとき紅い瞳がきつちりと捕えた無糖缶コーヒー。

一方通行は、躊躇なく足の裏にかかるベクトルを操作してその人物に駆け寄っていく。

「コーヒーください」

一方通行は、笑顔で手を振りながら恐るべきスピードでターゲットに向かっていく。

注意・現在の一方通行は、無糖コーヒーエネルギーが切れているため暴走状態にあります。接近の際には最新の注意を払ってください。

「はあ、知ったことか。とにかく消えろ」

コーヒーを飲んでいた人物Aは、それだけを言って、ISを部分展開してライフルで撃ってきた。

なんの躊躇もなく、ただ力エルがいたから解剖したと同じように。

だが、こんなことをされて黙っている程、一方通行の心は広くはない。

「なんだなんだなんですかアー、 temeーは。せっかく人が平和的にコーヒーを奪ってやろうって時に、愉快に発砲してきやがってエ」

「ああ、お前、IS所持者か。なら話は早い。貴様のIS貰うぞ」
人物Aは、どうやらさっきの攻撃はISによる防御によって防がれたと思っただけで、ISを全面的に展開して接近してくる。

そんな、人物Aを見て一方通行は目を見開く。

「三下ア、何、コーヒー捨ててンだよ。コーヒーってのはなア、聖水に匹敵すほどの神秘性があって栄養があつてスゲーンだよ。もう死体決定だ、クソヤロー」

人物Aは、一方通行の言葉など、無視して生身の一方通行に日本刀で切りつける。

だが、日本刀は、一方通行に触れた瞬間あっさりと折れ粉々になりゴミとなった。

「なっ」

人物Aは、驚きの声を上げるしか他ならなかった。

それも当然。簡単に言えば、世界最強の兵器の武器が生身の人間に粉碎されたのだ。

通常では、ありえない現象だ。

だが、目の前にいる青年は通常ではありえないことを平然と引き起こせるほどの力を持った化け物なのだ。

「デメエーに、コーヒーの裁きを下してやる」

その言葉で、人物Aの運命は終わり、跡には、悲鳴とグロッキーなものしか残らなかったという。

「あの世で、コーヒーに土下座しな」

一方通行は、そのまま立ち去ろうと後ろを向いた。

そこには、愉快になった死体とは別に人物Aが所持していたISが転がっていた。

しかしいくらISと言っても、マジギレの一方通行の猛攻を防げるはずもなく今は無残な姿になっている。

一方通行は、壊れたISのそばまで行くと手を突っ込め何か輝く物を引っこめいた。

「これが、ISのコアかア。コーヒー何個買えるかなア」

「っっていう感じで、5km先の自販機に行ッてたら、なんか、オレ専用のISになッていたア」

「あなた、もうバグキャラだわ。ていうか、殺人してなかった？」

そう言う楯無に、一方通行は言った。

「マスター、人は常に過去ではなく、未来を見ていく必要があると思っんだ」

「現実逃避かい」

という感じで、なんかマスターが転入届を出していたというわけさ。

それにしても、この学園にはなんで無糖の缶コーヒーがないんだよ。今度、マスターに頼んでみようかなア。

アレでも、生徒会長だしー。

そうこう考えていると、誰が近づいてきた。

黒髪の男子で、鈍感でリア充で爆発しろの奴だ。

「俺、織斑一夏。いやー助かったぜ。俺以外の男子が来て。正直、

辛かったんだ」

一夏は、どこか遠くを見つめていた。

そんな一夏に、一方通行はある妙案を思いついた。

「一夏、コーヒー買ってきてくれエ」

「知り合つて、5秒もたたずにパシリかよ」

「友達だろオ」

「都合がいいな、おい」

「ちょっと、よろしくて」

そうこう話していると、金髪の女性が急に入りこんできた。

「あん？」

「誰だア」

「まあ、なんですその返事は。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

「まあ！私のことを知らないと？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？まったく世界で唯一ESを動かせる男性と聞いて、少しは期待した私がバカでしたわ」

「うつせエーな。そんな肩書きがなけりゃー、碌に何もできねエー三下アが、なにいつちよまえな台詞を吐いてンですかアー」

一方通行が、急にキレて一方的に話し始めた。

「だいたいよォー、こっちだって好きでこんな辺鄙な所に来たわけじゃーねエーンだよ。それを上から目線で、ゴチヨゴチヨと。いっそ、殺すぞォ」

辺りは静まり返り、何も言葉を発せなくなった空間が一年一組を包み込む。

セシリアは、何か反論をしようとしたが、一方通行からの言葉や周りの空気に耐え切れず、すぐさま口を閉じてしまう。

すると、一方通行が、急に椅子から立ち上がった。

クラスの中には、今度は何やるんだろうと思うばかりか脅えている人もいた。

だが、あるうことが一方通行は窓を開けそこから身を乗り出そうと窓に足をかけていた。

「え、ちょ、何やってるの」

一夏が、一方通行の行動に疑問を持ち少し汗を垂らしながらも問いかけてきた。

一方通行の答えは実に単純なものだった。

「今、極上無糖缶コーヒーの匂いがしたァ。ひとつ走りして買ってくる」

そう言って一方通行は、窓から身を乗り出し夜空の空へと消えた。残された者は、『啞然とする』しかコマンドがなかったらしい。

人物AからIS奪ったぜww（後書き）

今回は、キャラ崩壊とご都合主義をフルに使ってみました。
コーヒータメタもなかなか侮れませんね。

良ければ、感想、コメントの方もよろしく願います。

クラス代表決定戦

「オルコット、一方通行、準備しろ」
千冬の言葉が、第2アリーナに響く。

「はい」

「何の？」

セシリアは、しっかりと返事をするものを、一方通行は何をすればいいのかわからなかったらしい。

そんな一方通行に一夏が話かける。

「そういえば、お前、転入してきてからそっこーサボったけ。その時、クラスの代表選んでいたんだけど、お前の無断欠席に怒った、ちふゅじゃなくて織斑先生がお前を無理矢理候補に出したんだよ。だから、推薦と立候補した俺たち三人が戦って勝った方がクラスの代表者ってわけ」

「なるほど、織斑先生って意外と短気だな」

「それを直接本人に言ったら、勇者って認めてやるよ」

そんなコントをしていると、織斑先生が懷から出席簿を取り出しているのが見えたのですぐさまISを展開することにした。

ホント、出席簿が刀に見えちゃうよ。

ISを展開すると、オレのISは意外と外道ということを改めて思い知らされた。

「お前、なんというか露出度がすごいな」

こう言われるのも無理はない。

なぜなら一方通行のISは下半身と肩にしか装備という物がなく、その箇所以外は普通に生身だ。

厳密に言えば、下半身には足に沿うようにスラスタなどの推進力や機動力を上昇させるようなものがあり、肩には楯の役目もするライフルビットが四つずつ付いている。（劇場版のサバーニヤガンダムみたいな感じ）

「うつせエー、これが俺にベストなんだよオ」

「早くしろ。一戦目はお前とオルコットだ」

セシリアは、もう上空で待機している状態だ。

「さてと、行きますかア」

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアが、話しかけてくる。

「最後のチャンスをおげますわ。このままわたくしが一方的な「さつさと終わらせるぞオ、三下ア」な、いきなり」

一方通行は、セシリアが話してるにも関わらずビットによる攻撃を始める。

「こちらら、午後にコーヒー買いに行かないといけねエンだよ。一分で終わらせてやる」

「なにをそんな減らず口を」

セシリアもビットを射出し対応する。

だが、ビットの操作には意識を集中しなければならないし、毎回指示を送らなければならない。

つまり、ビットを操るには同時に二つのことをしなければならないということだ。

そのせいでセシリアは、ビットによる攻撃を行う際は、それ以外の攻撃を行うことができなくなってしまう。

だが、一方通行は違う。

彼は、今となつてはサーヴァントとなっているが、生前では世界をも相手にできると恐れられ、その最優の頭脳であらゆる力を行使し、あらゆる敵を薙ぎ払ってきた。

その点では、生死の境を生きてきた一方通行とは住む世界が違いすぎるのだ。

つまりこの試合で、セシリアが勝てる道理は微塵の欠片も存在しない。

「くっ」

セシリアは、思わず苦痛の声を漏らしてしまう。

セシリアが射出したライフルビットは、次々と落とされていき今や防戦一方となっている。

「そろそろ、本気で行くぞオ」

一方通行のライフルビットの速度が上がる。

今まで防戦一方だったのに対し、さらに一方通行のライフルビットの速度を上げられてしまったら、もはや反撃する予知などもなくなり、このまま何もできず終わってしまう。

しかし、セシリアも伊達に代表候補生としてただこの学園に来たわけではない。

セシリアにも、意地がある。

セシリアは、なんとか一方通行のライフルビットによる猛攻をかわし射撃の体勢に入る。

そのタイミングは、まさに絶妙でプロのIS操縦者でもかわすのきついだろうといった感じである。

だが、一方通行はさらにその上に行く。

セシリアは連続射撃による合計3度の攻撃を行った。

一発目は、一方通行のライフルビットが射撃の機動線上に割り込んでき、身代わりになるのかとその場にいた誰もが思った。

かの『ブリュンヒルデ』もそう思っただろう。

しかし、現実とは違った。

ライフルビットに直撃したセシリアの一発目の射撃は、なぜか目標を破壊せずそのまま跳ね返り、第二射のビームとぶつかり消滅した。

誰もが、この現象に我が目を疑った。

攻撃を受けきるならまだしも、そのまま跳ね返すなど、並みの発想力では思いつかないことだ。

ISを開発した彼女ならまだしも、常人としてこの学園に入ってきた人たちは、大半がこの事実を理解できず忘れていくだろう。それほど、衝撃的なことなのだ。

一方通行は、3度目の射撃は自身が移動することにより避けたが、彼の顔は笑っていた。

「どうだア。絶対的な壁を前になすすべなくやられていく気分はよォー」

一方通行は、悪魔のほほ笑みようにその表情をゆがませ、両手を高く上げて言った。

「デメエーに、絶対的な敗北を味あわせてやる」

その言葉と同時に、一方通行のライフルビット全機が動いた。

まるで、鳥かごのようにセシリアを取り囲み不規則な動きで移動、射撃を繰り返しセシリアのシールドエナジーを削っていく。

時には、理論や理屈すらわからない『反射』による不意打ちや、連続攻撃。

時には、数か所からの同時攻撃。

時には、反撃すら許されないレーザーの嵐。

その光景はまるでクモの巣のようで、セシリアは一生ぬけ出せない、ただ喰われるのをまつモンシロチョウのようだったという。

（PM5:00）

今は学校も終わり、部活や寮に戻るといった、さまざまな人たちを見ることができる時間帯である。

一方通行は自分の部屋へと入り缶コーヒーを飲みながら、ベッドに横たわった。

ちなみに、一方通行が常時受肉できているのは、イレギュラークラスのス킬『魔力生成』のおかげである。

このスキルは、一方通行が受肉しているとき、大気や龍脈に流れている魔力を自分の魔力として吸収し、マスターへの負担を軽減できるといふものだ。

それよりも、今はこの状況をどうにかするのが先決だ。

一方通行は、向かい側のベッドへと視線を向ける。

「おかえりなさい。ご飯にします？お風呂にします？それとも、わた・し？」

そこには、裸エプロンと思われる格好をした、マスターこと更識楯無がベッドの上で礼儀正しく正座をしながら聞いてくる。

まあ、服装は全然礼儀正しくないのだが。

また、少し前かがみの姿勢で聞いてくるので、豊満な胸がやばいほど見えてしまう。

だが、一方通行はそんなことで動揺するほど落ちぶれていない。

なぜなら！

もう1週間前からこれをやられているからだ。

最初のころは、霊体化してよく逃げていたものだ。

「で、今日は何の用だァ、マスター」

「まあ、つれないわねえ。今日の試合のことよ」

一方通行は、楯無が何を言いたいのかわからず表情を崩す。

「あなたのISについてちょっと知りたいなあ〜とかおもちゃって」

楯無は、頬に人差し指を当てながら満面の笑みで一方通行を見る。

「ああ、オレのライフルビットのことかア。簡単なことだ。オレの能力であるベクトル変化は、オレに触れない限り意味がねエ。かといって、オレの能力を表ざたにするわけにもいかねエ。それなら、話は簡単だア。オレの反射をオレのISの能力だと思わせればいい。例えば、ライフルビットにオレの体の一部を植え付け、オレのISが放つ特殊なネットワークでオレとリンクさせる。そうすることによって、ライフルビットがオレの分身になるってことだア」

「へえ〜、一応理屈とかあったんだ」

「・・・マスター、 temeエーはオレをなんだと思ってんだア」

「チート」

「最低だなア」

そんなことを話していると、楯無が紙の束を出してきた。

「なんだア、そりゃアー」

「今日の、生徒会の仕事。というわけで、手伝ってよ、一方通行副生徒会長」

一方通行はそこまで反対しなかったが、どうしても確かめたいことがあった。

「その格好でやるのかア」

「襲わないでねえ？」

「あはっ」
「」

クラス代表決定戦（後書き）

いやはや、おもいつきり話が飛んじゃってすみません。

今回は、一方通行のISということで自分なりに工夫してみました。
どうだったでしょうか？

次は、鈴を出していこうかと思っています。

ちなみに、暗部編突入かも？

次回もおねがいします。

ツンデレって弄るとたのしいよね？

「鈴、何かっこつけてんだ。すっげー似合わねえぞ」

ただいま、アニメISの第三話を回想中。

「な、なんてことを言うのよ、あんも痛っ」

鈴は、後頭部に何かあったらしく、台詞を中断して頭を抑えかがみこんでいる。

「なに、人さまのクラスでデケエー声出してンですかア？」

鈴の後ろには、白髪灼眼の男が鞆を肩の担ぎ、鈴の頭を蹴ったであろう細い片足はくの字を描くように空中で止まっていた。

「痛っ。なに人の頭蹴ってんのよ、あんた！」

鈴は、一方通行の言葉に対抗するかのように立ち上がり一方通行に右手を突き出し、人差し指を向けながら、少々怒り気味に反論してくる。

鈴、復活は早いな。

一応、一方通行にくる反動も全て反射していたんだけど。

「うつせエー。だいたい、テメエーの頭がいい位置にあるのがいけねエーだよ」

一方通行が、正論に対抗してくる。

「な、なんですってっ」

鈴は、自分が気にしていることをあっさり言われたのが恥ずかしかったのか、顔を赤くしながらムキーと一方通行を睨んでくる。

すると一方通行は、今度は視線を鈴の頭から首より少し下、つまり女子特有のアレへと視線を移すと、

「はア」

と、皮肉な顔で長いため息をついた。

さすがの鈴も、自分がどこを見られて侮辱されたのか推理できたらしく、目を赤く光らせ、さらにISを部分展開、右手を淡いピンク色をベースにした装甲が覆う。

「こ・ろ・す」

鈴の、殺気を含んだ声が周囲を黒く染める。

一方通行は凶器を片手に迫ってきている鈴を無視して、鈴の身体的特徴の原因を述べた。

「だいたいよオ、その長い髪にカルシウムがいつて身長が伸びないんじゃないンですかア」。お前そんなに髪が長いとオ寝起きの時、やまんばになつてるだろ。そうだ、お前丸刈りにしろ。そうだ、それがいい。これでお前の悩みの一つは解決されたア。よし、次は、その胸をどうするかだア」

すらすらと鈴にアドバイスする一方通行。

鈴はもう沸騰寸前で、さっきまでの鬼の形相はもはや、好きな人の前ではずかしいことを言われた純情な乙女にしか見えなくなっている。

肌の色はもはや最初から真っ赤だったように変色し、右手に部分展開されていたISも解除されていた。

一方通行は語り終えたらしく、右手を前に突き出し親指を立ててこ

ういった。

「グジョップ」

ブチッ。

あ、ちなみにこの音は、のほんさんがポテトチップスを開けた音です。

鈴は、もうこの空気に耐えられないのか顔を真っ赤に染めて下を向き、無言で一方通行の側を通りぬけこのクラスを出ようとしたとき、ある人物が追い打ちをかけた。

ムニッ。

鈴が、後ろを向いたとき何かやわらかいものが鈴の顔にあたったらしく後ろに小さく下がった。

鈴は視線を少し上げ、何にぶつかったのか確認すると、

「ち、千冬さん」

その整った唇は、ぎこちなく確かにそう言った。

美女ともいうべき容姿とスタイル、そして黒のスーツが似合う大人の女。

それが、元世界最強IS操縦者、織斑千冬。

「織斑先生と呼べ。もうショートホームルームの時間だぞ。さっさと戻れ、邪魔だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

織斑先生が、出席簿を右手にきっぱりと言ってくるが、鈴は上の空。鈴はずっと織斑千冬の胸を凝視したままなのだ。

三秒ほど経つと、突如鈴は眼に一粒の涙を浮かべ、今にも泣き出し

そんな顔で一夏を見た。

「ん？」

一夏は、「どうした？」という感じで鈴を見ている。

さすが、『唐変木・オブ・唐変木ズ』と名高い織斑一夏だ。

鈴の心の叫びにも気付かないとは。

なんで、死なないのかなあ。

鈴の心は一夏のせいでもうボロボロ。（他2名除く）

拳句の果てに、鈴が取った行動は――

「一夏のバカアアアアアアアアアア」

鈴は、瞳から漏れだす涙を抑えるかのように両手で顔を隠し、涙の粒を残してどこかに行ってしまった。

この後一夏は、一度目の死をクラス全員から味わうことになる。

IS学園、地下特別区画。

IS学園の中でも一部の教師しか知らない場所、いわば秘密基地である。

そこには、二人の人影があった。

「何のようだ、更識。こんな所で話をしたいなどと・・・どういう要件だ」

「そんなに身構えないでくださいよ。今日はちょっとした紹介と許可を取りに来ただけです」

「紹介？」

千冬は、紹介という単語が引っかけたのかわずかに眉をひそめる。

「そう、紹介です」

更識はそう言うつと、右手に持っていた扇子を開いた。
そこには、『参上』の一言。

「急に呼び出しやがってエ。なんかようかマスター」
楯無の横には、いつの間にか白髪紅眼の男、一方通行がいた。

「なっ」

千冬は、啞然とした。

突然現れた、自分の生徒である一方通行に。
魔法でも使ったかのような現象に。
常識を覆すような一方通行に。

ツンデレって弄るとたのしいよね？（後書き）

今回は、いつもより少なめになってしまいましたが、どうでしたでしょうか。

明日も更新するつもりなので、今回の投稿はここまでとなっています。千冬の書き方が分からないので、よろしければ教えてください。お願いします。

運命は悲劇を呼ぶ

「なア、マスター。一応確認しておくけどよオ、ホントに能力を使つていいんだなア？」

一方通行は、ある森にいた。

そこは、優雅な自然に囲まれ、多種多様な植物が生茂っている。

また、ここら一帯は山岳に囲まれているため、外部からの干渉がないと言つても過言ではない。

だからこそ、目をつけられる。

例えば――――違法研究所。

ISをより効率良く動かせるために、人間をモルモットにし、あらゆる非人道的な研究を行っている場所。

人を、ただの道具としか思っていない、狂った科学者やマッドサイエンティスト等が集う、腐った巣穴。

だからこそ、一方通行が送り込まれた。

より過酷な過去を、そして真の闇を知っている彼だからこそ、マスターである楯無は、この殲滅戦に彼を選んだ。

『ええ、いいわよ。どっちみちここににいる者たちはただでは帰れない。私は、サポートに徹するから思う存分暴れてきなさい！』

特徴的な電子音の会話の中、通信はきれた。

始めの合図なのだろう。

対暗部用の更識家が用意した、核ミサイルではなく、弾頭ミサイルが違法研究所に向かって落ちていき、真っ赤な花火をちらつかせている。

一方通行はデバイザーで顔を隠し、爆破されていく研究所を見つめながら、凶悪な笑みを浮かべ、こう呟いた。

「さてと、お片付けの時間だア。簡単に死なせねエから感謝しろよ」

この言葉を合図に、一方通行の周りを風が多い、さらに一方通行の背中に4つの小規模な竜巻が発生。

一方通行は、まるで神々の使いのように暴風という名の竜巻を背に、飛び立った。

研究所内

「クソッ、まさかここが狙われるとは」

金髪碧眼の30代程の男性が机を強くたたき、怒号の声を上げる。

おそらく、この違法研究所の実質的なトップだろう。

その周りには、この違法な研究に参加していたと思われる白衣を着た男たちが、取り囲むように並んでいた。

「どうしますか。この研究所には、防衛兵器はそこまで多く設置されていません。やはり、離脱しますか」

眼鏡をかけた男が意見を言うが、金髪碧眼の男は眼をつぶりながら黙り込み、重たい空気が周りを包んだ。

やがて金髪碧眼の男は、ゆっくりと眼をひらき蒼い瞳が何かを語るように言った。

「F-95を出せ」

「なっ」

金髪碧眼の短い言葉は、周囲にいた研究者たちを困惑させた。

「しかし、まだあれは実験段階です。武器の調整も済んでませんし、何より精神の安定が今だとれていません。暴走する可能性も……」

「かまわん。どの道、私たちに残されたすべは数少ない」

「……わかりました」

IS学園・食堂

「そう言えばあの白髪、今日も来てないの」

鈴が、ラーメンを食べながら一夏に質問してくる。

「ああ、なんか用事があるんだとか。今日で二日目だぜ。まったく専用機持ちは、大変だな」

「なに、人ごとみたいに言ってるのよ。それを言うならあんたもでしよう」

あ、ちなみに、鈴をなかせた件は、一夏の土下座とラーメンの奢りでまるくおさまりました。

「まあまあ、そう言うなって」

一夏は、魚定食を食べおえ、背もたれにもたれる。

「そう言えば、鈴って此処んところ一方通行のことばっか聞いてくんな」

「ノノそ、そんなことないわよ。ただ、変な奴だなあゝって思っただけよ」

「ふうん、まあ、あいつの名前自体変だしな」

「そ、そうよ」

激しく同意してくる鈴。

そこは、否定して上げようぜ。いくら、ツンデレでも。

「（ただ、タロットカードで白髪の今日の不幸を占ったら……
……ジョーカーだったんだもん）」

意外と、デレの鈴さんでした。

ヤベツ、マジで一方通行がかわいそうになってきた。

「なんだなんだなんですかァー、この三下共は。全然、楽しく

ねエーぞオ」

一方通行は、風や熱量、地面に流れるあらゆるベクトルを操作し、次々と出てくる防衛用の殺人兵器を粉碎していく。

また、研究者たちも例外ではない。

一方通行の通った跡には、残骸や破片、血や死体等が原形などを残さず無残に転がっていた。

もはや、能力を隠す必要のない一方通行はただ破壊し尽くすだけだった。

一般人が、この光景をみたら誰もが地獄絵図だと思うだろう。

中には、気を失う人や吐いてしまう人も少なからず出てくるだろう。

だが、一方通行は躊躇なく殺人や殲滅を繰り返していく。

これよりも、酷いものを、悲劇を、彼は何度も繰り返してきたから。だからこそ一方通行は、あの少年を、あの少女を見て変わりたいと思ったのかもしれない。

それが、今の一方通行を造りだした新たな思い。

一方通行の二度目の人生。

「ん？」

一方通行は、突如その足取りを止めた。

ここに来るまで、地獄のような状況を造りだしてきた一方通行が、躊躇なく、表情一つ変えず、その目に入ったものを一瞬で破壊してきた一方通行が、その足を止めた。

一方通行は、ただ目の前に現れたISと思われる影を見つめていた。顔は暗闇の影響か、はっきりとは見えない。

年齢は、体の大きさや骨格の造りから見て15歳程の女の子だろう。

ISに乗った少女は、ゆっくりと不安定にこちらに歩み寄ってくる。一方通行とISに乗った少女の距離が3メートル程まで縮まると、一方通行は、歯をギリッと強く噛んだ。

ISに乗った少女の顔をはつきりと見て、一方通行の顔は怒りと悲しみ、二つの概念が覆い、表情を歪ませ、一方通行を内側から苦しませていく。

「なんでだ……なんでお前が此処にいる？」

一方通行は、いつもの口調を忘れ、ただ涙を流しながら震える声でもういない一人の少女の名前をただ、叫んだ。

「ラストオオオオダアアアアアアアア」

この瞬間、一方通行の何かが壊れたのかもしれない。

運命は悲劇を呼ぶ（後書き）

今回は、オリジナルストーリーとなっております。

次回の投稿は、10月の終わりか11月の始めと言ったところです。
次回も、よろしくお願いします。

過去との決別

「ラストオオオオダアアアアアアア」

その怒号は、大気を震わせ、地を揺るがす、負の叫びだった。

一方通行の表情は、もはや悲しみに飢えた一人の孤独な青年の顔だ。

頭の中にあるのはただ一つ。

自分の化け物染みた生涯を、人として歩ませてくれた、たった一人の少女。

彼女の笑顔だけが、一方通行の脳を侵食する。

「クソッ」

一方通行は、その考えをもみ消すようにデバイザーを取り、頭を左右に振った。

仮にも今は戦闘中なのだ。

いかに一方通行が重度のロリコンだろうと、今は殺し合いと言う地獄の時間なのだ。

周囲に散らばる破片や死体がそれを物語っている。

それに彼女がISと言う名の世界最強の武器を持ってこの戦場に立っている以上、何らかの研究で改造され、一方通行の敵として立ちはだかつたいる可能性の方がはるかに高いだろう。

一方通行はデバイザーを握りしめている拳に力を入れてしまい粉碎してしまう。

さらに一方通行は自分に、――彼女とは違う、別人なんだ――

と言いつき聞かせ、本来の任務に集中しようと演算を開始し、竜巻を主体とした風の刃を彼女に向けて放つ。

別に、命まで取ろうということではない。少なくとも、気絶や行動不能といった所で保護するつもりだ。

だが、あの少女の笑顔は一方通行の頭の中から消えない。消える気配すら感じられない。

そのわずかな思いが一方通行の演算を狂わせ、彼女にまっすぐ向かっていた風の刃は、彼女の横すれすれを通って壁に激突する。風の刃を受けた壁は、そこに大きな穴を開け、亀裂や瓦礫がそこらじゅうに転がっている。

殺す気はなかったにしろ、彼女に刃を向けた時点で一方通行にとっては苦痛だったのかもしれない。

しかし、打ち止めと瓜二つの彼女は待つてはくれないようだ。

「対象確認。F-95、これより目標を駆逐します」

機械的な言葉と共に、F-95と名のる者は足部についているスラストを点火させ、一方通行に急接近。

F-95は一方通行の懐に入り込むと、右手にプラズマを刀身としたプラズマブレードを展開。

青く光る剣を、一方通行に振りかざす。

一方通行は眼の前にいる彼女に刃を向けることをまだ恐れているのか、反射で相手ごと粉碎しようとせず、プラズマブレードの軌道をそらすだけにおしとどめた。

さらに一方通行は後方へと大きくさがると、足や地面に流れるベク

トル、重力や風圧のベクトルを使い足裏へ一点集中させ、強く地面を踏みつける。

そこを起点に、地面に亀裂が入り、風が起こり、あらゆるものを粉碎し続け、その光景はまるで連鎖崩壊のように、研究所をただの瓦礫へと変貌させた。

一方通行は、風のベクトルを操り地上から30メートルという所で違法研究所のなれの果てを見続けていた。その背中には、四つの小規模な竜巻が一方通行を空中で支えていた。

一瞬、一方通行はF-95と名のつた少女の事を心配するが、彼女が乗っているのは世界最強の兵器ISだということを思いだすと、すぐにその考えは吹き飛んだ。

彼女も今回の件では被害者なのだ。

大方、瓦礫にでも埋まって気を失っているだろう。

一方通行は跡の事を楯無に押しつけて撤退するだけなので、後ろを向き拠点へ帰ろうとしたとき、突如、真下からの七色に光るレーザーが一方通行の体を支えていた竜巻を吹き飛ばした。

いいや、正確には消したと言うべきか。

幸い一方通行に射撃が命中している様子はなく、両足に竜巻を発生させることで落下を阻止する。

一方通行を空中で支えていた竜巻には、東京ドーム2、3個分の空気が圧縮されていた。

それを吹き飛ばしたとなると、圧縮された風が一気に解放されかなりの余波があたりに広がるはずだ。

それなのに、一方通行の竜巻を撃ち抜いたとき余波どころか、一ミリの揺れも感じられなかった。

この情報だけで、一方通行のハイテク頭脳はそのレーザーの正体を

つきとめる。

「なるほどオ、おもしれエ能力だ。あのちんけな射撃だけで、その軌道射線上の窒素全てを取りこむとわなア。だがそんなことをしていたら、レーザーがとりこんだ窒素の質量分だけ射程距離縮んでしまふ。それじゃア、あの射程距離の長さを説明しきれねエ」

どうやら、一方通行はあの一瞬の出来事だけでレーザーの射程距離まで見抜いていたようだ。

さらに一方通行は、ゆっくりと振り向きこう呟いた。

「レーザーの一部として窒素をエネルギーに変換しているんだろオ？ - - - - - なあ、三下ア」

その視線の先には、2メートル程の狙撃銃を持ったF - 95がいた。

「.....」

無言の返答。

それだけで、一方通行の考えを証明するには十分だった。

一方通行は、再度口を開いた。

「デメエーは昔のオレによく似てるよオ。体のあちらこちらをいじられ、戦うことしかできないただの人形。命令された通りに動き、破壊だけを目的とした殺戮兵器。」

「だから、オレが救ってやる」

その言葉を合図に、一方通行の頭上に風が集まり始め、青い球体、プラズマを形成していく。

プラズマ青い輝きを放ち、空気を圧縮していく。

対するF-95も狙撃銃を構え、銃口を一方通行に向けチャージを始める。

「オレが、テメエを地獄の底から引きずりだしてやる」

プラズマがより強い輝きを放ち、空気の流れも荒らしくなり、木や地面、瓦礫をえぐりとり始めた。

「だから――――――――――歯アくいしばれエエエエエエ
エエエエ」

その瞬間、七色の光と青き光が激突し、辺りを創世の光が包み込んだ。

「遅かったじゃない。あれ、その子は？」

無事に合流した楯無と一方通行は、辺りに機械やモニターが置かれている拠点で言葉を交わしていた。

一方通行は、15、6ぐらいの少女を抱きかかえていて、服装はあちらこちらが焼焦げているバリアジャケットだ。

F-95と呼ばれていた少女だろう。

あちらこちらに擦り傷などの軽傷があるが、命に別状はなく、気絶している。

「今回の件の被害者だ」

そう言って一方通行は、少女を楯無に渡した。

「な〜んだ。ついに犯罪に手をそめたかと思って期待してたのに〜」
「ンなわけねエーだろ。それに、期待ってなんだよ、期待って!」
「別に〜」

楯無は一方通行をからかうと、気がすんだのか少女を抱えて拠点の奥に行ってしまった。

「チッ」

一方通行は、やられたという感じで舌打ちすると小声で、こう続けた。

「これで、オレも少しはお前に近づけたかな・・・・・・・・・・・・・・・・..
なあ、ヒ―ロー・・・・・・・・..」

その言葉は、太陽が沈んでいくように静かに響き消えていった。

過去との決別（後書き）

今回は、投稿が少し遅れましたが、楽しんでいただけたでしょうか。一方通行の戦闘はどうでしたか。

と言っても、そこまでの戦闘シーンはありませんでしたが。

次回は、あの二人が登場かも？

次回も、よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5106x/>

生徒会長が一方通行を召喚しちゃった

2011年11月4日15時12分発行